

感染していた。一方、薬剤感受性試験の結果、男児が感染していた Hp だけがクラリスロマイシン耐性 Hp (CRHP) だった。クラリスロマイシン耐性化に関わる、特異的な 23SrRNA 遺伝子の塩基変異 (A2143G) が確認された。これらの結果から、男児は濃厚感染者である父親から感染をうけ、胃の中で耐性化したと考えられる。

呼吸器感染症などの治療にクラリスロマイシンがよく用いられるが、小児から分離される Hp が高頻度でクラリスロマイシンに耐性であることが問題となっている。クラリスロマイシン耐性は、今後除菌治療を行う上で深刻な問題となる可能性があり、小児の Hp 感染の実態の把握と対応の検討が必要と考えられる。

5 悪性腫瘍患者の悪臭に対するメトロニダゾール軟膏局所塗布および経口投与の効果性に関する臨床的検討

戸谷 収二・佐藤 英明・小野 徹
又賀 泉・松永 恭子*・影向 範昭*
大森みさき**・長谷川 明**

日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学
教室第2講座
同 薬剤科*
同 口臭外来**

癌性悪臭に対し抗トリコモナス剤であるメトロニダゾールを用いて消臭を試み、臨床的に検討した。対象は上顎洞癌が2例、口底癌、上顎歯肉癌がそれぞれ1例の計4例である。

【方法】軟膏使用症例では、患部を十分清拭、消毒後、メトロニダゾール含有軟膏を一日1～2回創面に塗布した。また、内服症例では、一日500mgを朝夕2回に分けて投与した。悪臭の判定と改善度評価方法は、吉澤らの報告に準じて、0点～3点の4段階に分類し、使用前の点数と比較し改善度の評価を行った。

【結果】軟膏のみ使用症例では無効であったが、軟膏と内服を併用症例では、有効であった。2症例に対し、揮発性硫黄化合物測定器と簡易口臭測定器を用い悪臭を測定した結果、メトロニダゾー

ルの効果を反映した結果が得られた。

【結論】メトロニダゾールによる癌性悪臭抑制効果について官能のおよび客観的に評価し、その臨床的有效性が確認された。

6 増殖性変化を呈した口腔カンジダ症の治療経験

二宮 一智・南部 弘喜・又賀 泉
久和 彰江*・仲村健二郎*・青木 茂治*
日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学
第2講座
同 先端研究センター*

口腔カンジダ症の病態としては偽膜性あるいは肥厚性を示すことが良く知られているが、臨床所見において定型的でない症例に遭遇することがある。今回当科において初診時の臨床診断で腫瘍を疑ったが病理組織学的診断においてカンジダ性肉芽腫と診断された4症例に臨床的検討を施行した。

発生部位別では、頬粘膜2例、歯肉2例、であった。その内2例は口腔癌術後の移植皮弁粘膜境界部に発症していた。病変の大きさは長径が4～7mmであった。臨床症状では、全例に自発痛は認めなかったが、全例に接触痛を認めた。臨床所見では全例で有茎性の腫瘍を示しており、また表面は白色の顆粒状の所見を呈していた。病理組織学的には全例で角化層に菌糸の侵入を認めた。増生の主体は上皮の増生と上皮下の炎症性肉芽組織の増殖からなるとされカンジダ性肉芽腫と診断された。真菌培養検査において *Candida albicans* が全例で同定された。治療法は、全例で摘出生検術を施行している。術後病変の再燃は認めていない。